



ページ 頁繰り時空旅する夏の朝

先日、徳川宗家第十九代当主 徳川家広様のお話を聞く機会を得た。三河武士の結末、関ヶ原の戦いの意味、遺訓と遺言の違い等、学術研究と私見を交えた興味深いお話であった。家広様は、国連食糧農業機関ローマ本部とベトナム支部に勤務された経験を持ち、帰国後は翻訳家、政治経済評論家としても活動されている。かの家康の血を引き継ぐ人物が、世界でご活躍のこと、そして目の前に立っているという現実には、言い知れぬ感慨を覚えた。

くしくも大河ドラマ「どうする家康」では、正妻の築山殿と息子の信康の運命が描かれる場面。戦国の世で一つ歯車が狂ったら、安定した江戸時代は築かれなかったであろうし、現世に家広様は生まれていなかったかもしれない。そして、それは私たちとて同じ。身近な人にも家康の子孫がいるやもしれず、私たちの祖先は皆、家康と同じ時代を生きていた。当たり前だが普段意識することのない命のつながりと、一人一人の命の奇跡を感じずにはいられない。

さて、本校では六月中旬に「こっこつ読書週間」を設けた。朝、八時二十分頃の校舎を巡ると、一年生の教室からたどたどしい声が漏れてくる。子供たちが自分で選んだ絵本を机に広げ、一文字ずつ指で押さえながら微音読する声である。それ以外は静まり返っている。平仮名を習ったばかりの一年生にとって、内容がどこまで理解できたかは分からない。だが、好きな本を一冊ずつ読み進め、八人全員が目録冊数の十冊を達成したことが称賛に値する。

本校児童は外遊びが好きで、運動場や遊具で遊ぶのはもちろん、ギョギョランドで小魚を見たり、草むらで生き物を捕まえたり、育てているアサガオや野菜、クワガタやトカゲの成長を喜びながら世話したりしている。そして、カナヘビとニホントカゲの違いを、あるいはその雌雄の区別を、生き生きと説明してくれる子の多さに驚く。これは生き物に直接触れる体験や、身近な人から教えてもらえる機会が豊富なのだと思う。中には生き物の苦手な子もいる。しかし、触るのは苦手でも、小さな命の重みを考え、大切にしようとする思いや知恵が育まれている。

直接体験に勝るものはない。しかし、体験できることに限りがある分、人から聞くこと、書物から学ぶことは、人生を数倍豊かにする。特に児童期に読書の楽しさを味わい、自分と異なる考えをもつ人に思いをはせる経験は、他者理解のきっかけになり、その後の人生に影響を与える。

うっとうしい梅雨を抜けると、夏休みは目前である。好きなことができる平和な世に生を受けた奇跡に感謝しつつ、興味の向くことを粘り強く追究したり、読書を通して心の旅を満喫したりできる夏になることを願う。

